

河西便り

10月号
2023.10.30 河西中学校



<「読書の秋」とは・・・>

～「読書の秋」の由来は古代中国に遡る～

「読書の秋」を辞書で調べてみると、「読書に適しているとされる季節」とあります。

なぜ読書に適しているかと言うと、昼の時間が長い夏に比べ、夜が長くなって来るから。「読書の秋」は「秋の夜長」は読書しよう」というイメージに結びつきます。

実は、「秋の夜長はやっぱり読書！」というイメージは、古代中国の人物の漢詩がモチーフになっています。

そのモチーフになった漢詩とは、8世紀の中国の韓愈（かんゆ）という文人が書いた「符読書城南詩」という詩です。

この「符読書城南詩」は学問をすることの大切さを詠んだ詩なのだそうですが、この中に「灯火稍（ようや）く親しむべく／簡編卷舒（けんじょ）すべし」という節があります。

意味は、この直前の節と合わせて、「涼しい秋になったので、ようやく灯火の下で読書を楽しめる」というようなことです。

火を灯すのはもちろん夜ですから、この韓愈さんの詩が、「読書の秋」＝「秋の夜長は読書」のイメージの由来になったと言われているわけですね。

四季のなかではやっぱり一番読書しやすい？

実際のところで考えてみても、秋は、暑い夏と寒い冬の境目で、少しずつ寒くなっていく季節ですよ。

「暑くて何もする気がおきない……」なんていうこともありがちな暑い夏が終わり、秋は「過ごしやすくなってきた」と感じる季節です。また夜の時間も長くなっていくでしょう。

そこで「涼しくなった秋の夜長には読書しよう！」というわけです。先ほどの韓愈さんの詩にたどりつきます。

また、読書はある程度時間がかかるものですから、快適な時期に、まとまった時間をとれるこの季節は、たしかに「読書の秋」と呼ぶにふさわしいかもしれませんね。

～読書週間はいつから～

「読書の秋」だから「読書週間」が開催されているという訳ではなく、太平洋戦争の終戦まもない1947年（昭和22）年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。

そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回からは期間も10月27日～11月9日（文化の日を中心にした2週間）と定められ、この運動は全国に広がっていきました。そして「読書週間」は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

<学校の様子>



～2年生行事～



～玄関黒板～